

伊庭可笑作『珍説雷姻禮(ちんせつかみなりのこんれい)』翻刻と注釈：(附)前稿「黄表紙作者伊庭可笑についての基礎研究」追記

園田, 豊

<https://doi.org/10.15017/4742082>

---

出版情報：雅俗. 18, pp.98-113, 2019-07-16. 雅俗の会  
バージョン：  
権利関係：著作権保護のため論文中の図は非表示

伊庭可笑作『珍説ちんせつかみなのこんれい雷姻禮』翻刻と注釈

—(附)前稿「黄表紙作者伊庭可笑についての基礎研究」追記—

園田 豊

底本 東京都立中央図書館加賀文庫蔵 (請求記号…函三〇一八)

中本、上下二巻二冊、全十丁。

刊年 天明二(一七八二)年

画工 鳥居清長

板元 岩戸屋

柱刻 「ちんせつ 一(〜十)」

凡例

翻刻にあたって、次のような方針によった。

- 1 原文はほとんど平仮名書きで句読点を欠く為、適宜漢字に直し、句読点を補った。元の仮名は振り仮名として残した。
  - 2 原文の仮名遣い、送り仮名の不備等はそのままとした。
  - 3 濁点、半濁点を適宜補った。
  - 4 漢字・慣用字については、原則として、新字体・現行の字体を採用したが、定本の表記に従ったものもある。
  - 5 反復記号「く」「ま」「ゞ」は原則としてそのまま残した。
  - 6 人物の科白には「」を付け、人物名を上(〜)で示した。
- また、注釈を施した語句・文章には番号を付した。書誌・注釈・補足は、翻刻より二字下げて記した。

著作権保護のため図は非表示



〈前表紙〉

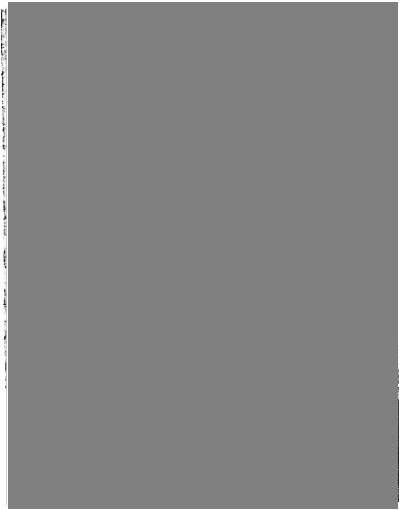
〈前表紙〉

原表紙。

珍説雷姻禮 全

後題箋、後人の墨書。

〈前表紙裏〉



〈前表紙裏〉  
珍説 雷 姻禮 上 はん元

岩戸屋

文字題簽（原題簽）。色は薄い紺。

ちんせつ上

絵題箋（原題簽）。三色刷り。

一丁ウラ〜二丁オモテの内容を示す画。

※本来、文字題簽と絵題簽は、前表紙に貼付されているものであるが、底本の加賀文庫本では、前表紙裏に貼付されている。

〈上〉

〈二丁オモテ〉

昔より雷を嫌ふは、その者の(1)生得性に当たり、どの様な勇氣ある者も甚だ恐るゝものなり。こゝに(2)戸右エ門と言ふ者、夫婦(3)掛向にて、いと(4)微かなる暮らしなりしが、女房を(5)おかやとて、(6)人洗濯等して明け暮れ稼ぎける故、ついに(7)鬢差を入れて髪を取上げたる事もなく、取り乱しぬれども、美しき事、(8)蠟石細工の(9)天人かと怪しむ程の女なり。

(戸右エ門)「今日もおかしな(10)空合だ。洗濯物はよしやれ。(11)どぶかごろ付そふで気味が悪い」

(1) 生まれつきの性質。(2) 雷が鳴ると、雷を恐れて戸棚へ駆け込む所から付けた名。(3) さし向かい。(4) 目立たない。(5) 雷が鳴る時、蚊帳の中にいると安全という所から付けた名。(6) 手間賃を貰って他人のものを洗濯すること。(7) 女髪の鬢の中に入れて、左右に張り出させるのに用いる。(8) 白蠟のように色白で、きめの細かい肌をした美人。

(9) 天女。(10) 空模様。(11) どうも雷がゴロゴロ鳴りそうで。  
※裕福ではないが、仲睦まじそうな夫婦の姿が描かれる。

二丁ウラ〜二丁オモテ

折しも、夏の事なりしが、おかやは洗濯せんと外へ出でしに、忽ち空  
かき曇り、凄まじき雷にて、戸右エ門は早々〔戸棚へ駆け込み、息を  
殺して居たりける。

こゝに又、〔筑波の雷、少し用事ありて此所を通りかゝり、おかや  
が美しきに見とれ、思はず雲を踏み外して、すんと落ちたり。おか  
やは夫の嫌いなれば、介抱せんと、盥も洗濯物も捨て、駆け入らんと  
せしを、雷に捕らへられ難儀する。

(雷)「これ、あの様な雷位を怖がる亭主を持つていよふよりは、  
俺が言ふ事を聞いてくんな。そうしたならば、もふ空へは上がらぬ。  
そうすると、先づ、雷が一人も減ると言ふものだから、夫の為にも  
ゑ、と言ふ様なものだ。これさ、怖へ事はなへ。こちら向きな」  
おかやも嫌と言はゞ、忽ち、夫の隠れ居る戸棚へ鳴り込みそふな気色  
故、〔さよころの歌〔とも出られず、大難儀する。

(1) 三方を板などで囲い、中に棚を作つて物を載せ、前面の戸を開けて出  
し入れする家具。(2) この所、飛行中の久米仙人が洗濯をしていた若い  
女性の白い脛に目を奪われ、神力を失い、地上に落ちたという、古来から  
有名な説話に拠る(『今昔物語集』巻第十一、第二十四話等)。(3) 「さら  
ぬだに をもきがうへに 小夜衣 わがつまならぬ つまな重ねぞ」(『新  
古今和歌集』巻第二十釈教歌 不邪姪戒)。(4) という態度にも出られず。

二丁ウラ〜三丁オモテ

戸右エ門女房は、雷につれなくも言いかね、「なる程、それ程に思し召

す事ならば、(1)何の嫌でもなければ、お前のその形で、その様な怖い顔して普段おいでなさっては、世間の聞こへ、夫の思惑、どふもこれに困りしものなり。どふぞ人間の様になつておいでなさつたら、その時はどふとも」と言いける故、雷は、それより、先づ太鼓は(2)浅草の人形店へ売つてやり、虎の皮の褌も(3)丸角へ(4)捨て売りにして、その金にて料な(5)長い羽織を拵へ、(6)菊寿の帯でも拵へて、先づ形は相応な色男となりしが、どこの髪結床へ頼んでも、角を剃り落としてくれるものなく、これに困りしが、ある時、両国を通りかゝり、薬売りの歯を抜くを見て、これは良しと頼みしに、少し薬を付けて手拍子を打つと、両方の角、一度に痛みもせず抜けし故、喜ぶ。

(権次郎)「(7)反魂丹は後でお召しなさい。それ、後ろからも買はふとおっしゃる。押してはあげるな。(8)茗荷屋権次郎が家の看板、あの大太刀を抜いて、お目に掛ける」

(売人)「はいく」

(雷)「あの歯の抜けるを見ては、角も抜けそふなものだ」

(1) 何も嫌なことはないけれども。(2) 浅草寺内中廓にあった。(3)

本町二丁目(現、中央区日本橋辺)にあった袋物見世の丸角屋次郎兵衛。

ここで販売された鼻紙袋、紙入れ、巾着類は通人の間で好んで用いられた。

(4) 投げ売り。安く売ること。(5) 着物の丈と殆ど同じような長さの羽織。この頃、通人の間で流行った。(6) 歌舞伎俳優二代目瀬川菊之丞が

使用し、安永・天明頃流行した染模様で、菊の花と寿の字を交互に染め出したもの。(7) 芝田町四丁目堺屋で製した薬の名称。霍乱・食傷・腹痛に効き目があった丸薬。(8) 当時、両国に出店を構え、居合抜きと口上で歯磨きを売った、茗荷屋紋二郎(浮世くらべ)安永三年刊)を当て込んだ命名か。

※権次郎の右足元には、くさり鎌も見える。

三丁ウラ〜四丁オモテ

さても、雷は角を抜きしより、(1)大の意気ちよんに髪も結いて、戸右エ門が方へ来たり、約束故、おかやを手に入れんと色々どくどく。おかや、雷に難題を言いて帰し、その内、来たらざる故、嬉しく思いしに、存知の外、髪形、形格好、人間となりて、名も(2)庄九郎改め来たりし故、肝を潰し、又、(3)一寸逃れに(1)あやなす。

(雷)「さあ、おかやさん。お前の好みの通り、通人の色男になりやした。これでは、(5)いざござなしに寝る気であるふ」

(おかや)「なる程、お約束の通り、これから可愛がつてくんな。しかし、昼はどふもせはしなくて話もなりませぬから、晩には(6)内で、咄に出さんすから、その留守へお出でなさんせ」

(戸右エ門)「あの庄九郎といふ奴は、どふか嘘気味の悪い奴だ。そして、か、あめが俺を(7)めぐりにでも勧めて、晩に追い出して、(8)うまい事をしやうで。見限り果てた女めだ」

(1) 大通人のごとく意気ちよん本多齋を結つて。「出ず入らずの男女好と結」(『辰巳之園』明和七年刊)。(2) 「と」脱か。庄九郎と名前を改め。庄九郎は芝居などで有名な『雁金五人男』の一人、「かみなり庄九郎」に拠る。(3) その場逃れに。(4) うまくあしらう。(5) 苦情なしに。(6) 仲間内での夜咄。(7) めくりカルタの略。一組四枚十二組四十八枚の札で行なうカルタ博奕の一種。(8) ここでは、情事。

※何故か、ここでは、おかやは鬢差しを入れて髪をきれいに結っているのが、可笑しい。

〈四丁ウラ〜五丁オモテ〉

〈四丁ウラ〜五丁オモテ〉

戸右エ門は庄九郎が帰るを待つて、何食はぬ顔にて女房に向かい、「俺は、今夜、約束でめくる所があるから出てくる」と言いしに、(1)存知の外、おかやは肝を潰し、「今夜はどふぞ止めにして下され。さて、他の事でもござんせんが、さつきに来た庄九郎が事、あの人は雷でござんす。いつぞや門口へ落ちた時、色々私を黽つて、嫌と言つたらお前の為にならぬと思ひ、人間になつて来たならば、その時は心に従ひませうと、難題を言つておきしに、どふしてか人間の形になつて来て、色々無理ばかり言ひます故、晩に忍べと約束して、先づさつきは帰し、此事をお前に話して、此所を(2)店替へして、(3)鼻を明かせてやらんと思ひまして、晩に来る筈の約束でござんす。どふぞ、来ぬ先に、どこへでも立ち退いて下さんせ」

(戸右エ門)「さつきにちらとその事も聞いたが、(4)おのしが心を引いてみよふと思つて、今夜出ると言つた。そんなら、早く支度をして、店替へとでよふ」

(おかや)「(5)雷の際に、馬鹿らしい奴さ」

(1) 思ひの外。(2) 引越し。転宅。(3) 出し抜く。(4) お前の心を試してみようと思つて。(5) 雷のくせに。雷の分際で。

〈五丁ウラ〉

夫婦の者は、庄九郎が来ぬ先に、書き置きをして家を空け、何処ともなく立ち退きし後へ、庄九郎来たり。忍び入りて見るに、人気なく、何か一通捨て、あり。開き見るに、女房が貞節、夫も我を憎しみもなく、住み慣れし家を立ち退くとは、なる程、よくの事なり。皆、我が邪なる心より起こりし事と、浮世を思い切り、漸ふ此頃、料に結

い慣れし黒髪も、(1)我と我が手に下ろし、仏道に入りしは殊勝なり。  
 (雷)「二人の者、心の内、さぞ(2)難儀なるべし。浮世は夢の世の中。  
 南無阿弥陀がらく」

〈下〉

〈六丁オモテ〉

こ、に又、筑波の雷が女房稲妻は、過ぎし頃、夫の行方知れざる故、  
 色々尋ねしが、今は在り処知れず、他へ縁付きたいには、(3)持参に持  
 ち行く臍もなし。今迄取り貯めたる臍は皆、夫が持ち行、置き去りの  
 身の上、待つ後家暮らしに、折節(4)光らせけれども、さてく光るは  
 かりでは、張り合いの無いものなり。

兩平、雲七と言ふ者、心安く、折節来たり話す。

(兩平・雲七)「お前もまだ若い、どこぞへ片付きなさればゑ、。し  
 かし、今は、持参臍の二三十も無ければ、(5)口が無へす」

(1) 自分自身で髪を下ろし(剃り)。(2) つかいことであつたらう。(3)  
 嫁に入る際の持参金。ここは雷なので臍という事になる。(4) 稲光りと、  
 安永頃の通言「美しい」を掛けた。「ひかる 光と書うつくしき事也」(「胡  
 蝶夢」安永七年刊)。(5) 再婚の口が無いよ。

※稲妻は稲光の形をした簪を挿している。

〈六丁ウラ〜七丁オモテ〉

その後、戸右エ門夫婦の者は、庄九郎をうるさく思い、店替へして暮  
 らしけるに、二人の者立ち退きし後へ庄九郎来たり、我が邪なる故、  
 人の難儀となり、今は山奥深く身を退き浮世を捨て、発心して名も  
 (1) 鳴神上人とて行ない澄ましている事を聞き、二人ながら安堵して暮  
 らしける。



(おかや)「かの雷殿も、今は鳴神上人と名を変へて、尊い出家になられたげな。ほんに、私が様な外聞の悪い、雷さんに見込まれると言ふ話の種でござんす」

稲妻はある夕暮れに、戸右エ門が屋根の辺りを光り歩きしに、夫雷が今は出家せし事、鳴神上人と言ふ名まで聞き、心嬉しく思い、しかし、人間の女に迷い、幼馴染の我を捨てたる夫なれば、心を残す事もなし。唯、夫の持ち出でし臍を奪い取り、持参として、他へ嫁入せんと心に喜ぶ。

(一)『鳴神上人北山桜』の世界を綱交ぜする手法が見られる。

※雷より逃れ、平和が戻った戸右エ門・おかやの様子が描かれている。それを屋根の上から何う稲妻、右手に光る玉を持つ。

〈七丁ウラ〜八丁オモテ〉

庄九郎、過ぎし頃、黒髪を下ろし、雷を引っくり返し、今は鳴神上人とて、此奥山に引籠り、故郷より持ち来たる臍を壺に入れ、これを封じ込め、日夜此所にて行ない澄まして居給ふに、稲妻は此程、戸右エ門夫婦の話聞きしより、何卒、上人の封じ込め給ふ臍を手に入れんと、里近き者なりと偽り来たる。こここの詞書は、鳴神の上瑠璃の通りなれば、何にも書かず。しかし、上瑠璃の鳴神と違った事は、稲妻は以前の女房なれば、鳴神が見知っている筈なれども、雷は至つて物覚へが悪いと見へたり。

(稲妻)「その馴れ初めの始まりは」

(鳴神)「して〜どうじゃ、その下の句は。あ、それよ、俺も忘れた。こ、が物覚への悪いところだ」

※鳴神上人の後ろには団扇、床の間には臍が入ったと思われる壺が置かれ

〈七丁ウラ〜八丁オモテ〉



ている。

※この場面は『鳴神上人北山桜』の趣向に拠る。江戸の鳴神作品の基盤とされる寛延四（一七五二）年三月、市村座所演の資料を左に示す。（東京大学総合図書館所蔵、電子版霞亭文庫より）



〈八丁ウラ〜九丁オモテ〉

鳴神上人、以前、雷の時、心安き黒雲は今御弟子となり、黒雲と言ひ、白き雲はどふいふ訳やら、これも御弟子となり、白雲と言ひて仕へしが、稲妻が髪を下ろさん為に、剃刀を取り来たれど、師の坊の言いつけにて、麓に下りたる留守に、〔一〕稲妻が色に迷ひ、上人は酒に酔ひ伏し給ふ。折から、稲妻はかの臍の入りたる壺をばい取り、転けつ転びつ逃げ失せける。

〔八丁ウラく九丁オモテ〕

上人目覚めて起き上がり、破戒せしを無念に思い、壺の無きを見て、大きに腹立ち駆け出し給ふを、両僧押し止むる故、右左へ取つて投げ、恐ろしかりける有様なり。元雷故か、面色忽ち角生い出で、雷の如くに見へる。

(雷)「女め、そのま、おかふか。そこ離せ」

(稲妻)「大願成就、有難や」

(1) ここも『鳴神上人北山桜』の趣向に拠る。先と同様、寛延四(二七

五一)年三月、市村座所演の資料を左に示す。(東京大学総合図書館所蔵、電子版霞亭文庫より)



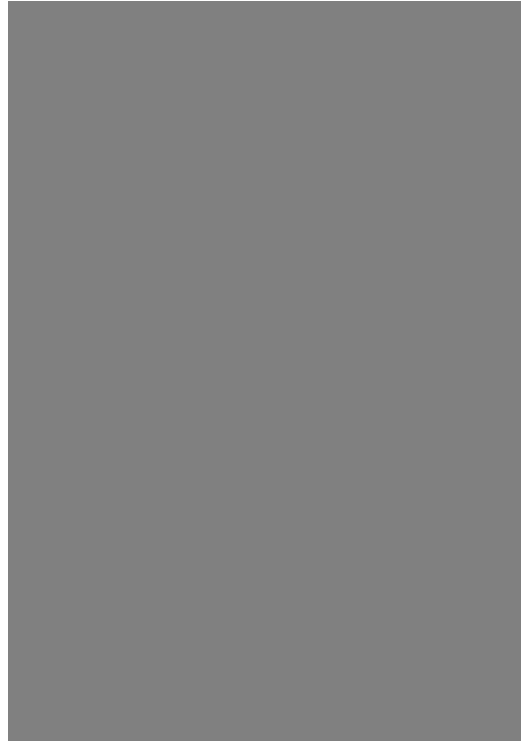
年々同じ様な事なれ共、大晦日はどこもかしこも忙しいは、(1)世上一統なり。戸右エ門方にても、少しづつ、の(2)買い掛かりを払ふやら、(3)払いを取るやら、宵に乱騒ぎにて漸う終い、亭主は神棚へ燈明を上げ、女房は(4)福茶の釜の下を焚きつけるやら、(5)先づぶ、はと、夫婦炬燵に当たり、煤掃きからのくたびれ、一時にお見まい申、二人ながらとろくろと寝ぶる。

さる程に、稲妻は、かねて心を掛けし臍を取り得、故郷へ帰らんと思ひしが、これと言ふも、戸右エ門夫婦が話にて在り処を聞き出だしたる故なれば、何ぞ戸右エ門に礼をして帰らんと思ひ付き、戸右エ門が至つて雷嫌い故、雷避けを授ける。

(稲妻)「これく、これは節分の豆なり。此豆を(6)初雷の鳴る時食へば、その年中、雷に怖るゝ事なし(7)奇妙なり。もし、此豆が無くなつたなら、忘れぬ様に、その年の節分に、豆を取つておいて用いべし。必ずく、疑ふべからず。ぴか〜く〜」

(1) 世間いづこも同じ。(2) 掛けて買った品物の代金。(3) 貸した金を返してもらう。(4) 節分・大晦日・正月等に縁起を祝つて飲む茶。山椒・梅干・黒豆を入れて煮出した茶。昆布を入れる所もある。(5) 先ず、これで良いわ。(6) 初雷のときに年越しの豆を食べると雷が怖くなくなる(大野誌(神奈川県)) (7) 故事俗信ことわざ大辞典(小学館、一九八二年刊)。(7) 素晴らしい効き目がある。

〈十丁ウラ〉



〈後表紙裏〉



〈十丁ウラ〉

それより稲妻は故郷へ帰り、かの臍一壺を持参として、雨平・雲七が世話にて日光雷が所へ片付き、夫婦睦まじく、夏を待つて光る様、鳴る様、あんまり仲が良過ぎては世上の難儀なり。先づ雷の方では、未繁昌して目出度く栄へける。雷の方では、人間の銭金を欲しがらる様に、臍を欲しがらる故、①お子様方も雷の鳴る時、臍を隠してお出でなさい。

(雨平) 「おめでたい」

(雲七) 「②臍一つ程は、きつとしたお土産だ」

清長画

可笑作

(1) 「かみなりをまねて腹がけやつとさせ」(『誹風柳多留』初編、明和二年刊)。(2) 確実に臍一つ位はお土産に貰えるだろう。

※持参臍の横に雷の太鼓が九つ重ねてある。これも持参品であろう。

〈後表紙裏〉

ちんせつ下

絵題箋(原題箋)。三色刷り。

六丁オモテの内容を示す画。

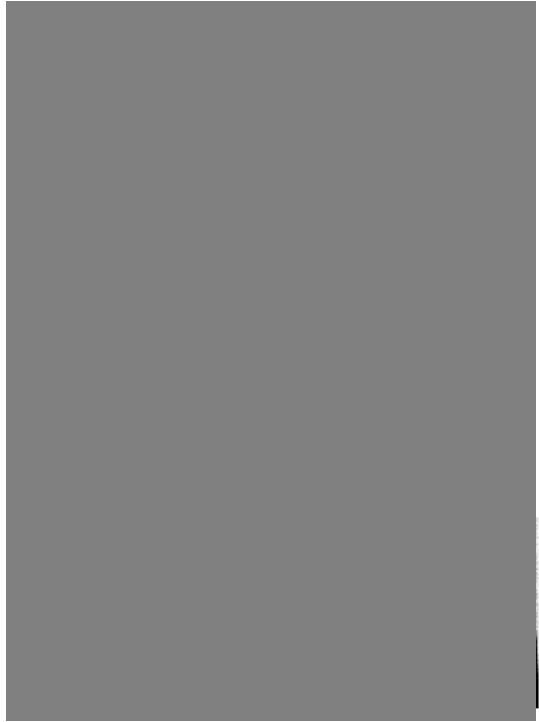
珍説 雷 姻禮 下 はん元

岩戸屋

文字題箋(原題箋)。色は薄い紺。

※本来、絵題箋と文字題箋は、前表紙に貼付されているものであるが、底本の加賀文庫本では、後表紙裏に貼付されている。

〔後表紙〕



〔後表紙〕

原表紙。

最後に、大田南畝編『岡目八目』（天明二年刊）の評を記しておく。本作は「若女形之部」で「上上吉」の位に据えられている。（一）  
 の中は、園田注）

〔頭取〕戸右衛門女房おかやと成 〔わる口〕さよごころもの歌といふ所を、さよごころの歌とかいてあるが、ごころくといふ事欸（そういう事であろうと思ふ）。たゞし落字欸 〔頭取〕エヘンく。二役かみなり女房いなづまにて、いなづまのかんざしよし。扱なるかみのまくまで、よさはよいが、ちつと末がつまらぬ。なるかみはどこ

へかいつたと、お見物のおうたがひも御座らうが、そこがくもをつかむやうなちんせつ、尤く（さすがは南畝で、頭取の言葉によつてうまく収めている）。

〔参考文献〕

- 滝沢馬琴著『著作堂一夕話』（日本随筆大成第一期第十卷、吉川弘文館、一九七五年刊）
  - 朝倉無聲著『見世物研究』（思文閣出版、一九七七年刊）
  - 戸板康二著『歌舞伎十八番』（中央公論社、一九七八年刊）
  - 『故事俗信ことわざ大辞典』（小学館、一九八二年刊）
  - 濱田義一郎校注『誹風柳多留初篇』（現代教養文庫一三三、社会思想社、一九八五年刊）
  - 『大田南畝全集 第七卷』（岩波書店、一九八六年刊）
  - 井上隆明著『江戸コマールシャル文芸史』（高文堂出版社、一九八六年刊）
  - 『日本伝奇伝説大事典』（角川書店、一九八七年刊）
  - 延広真治監修・鈴木俊幸編『シリーズ江戸戯作 唐来三和』（桜楓社、一九八九年刊）
  - 岡雅彦校訂『滑稽本集』二（叢書江戸文庫⑩、国書刊行会、一九九〇年刊）
  - 朝倉無聲著『見世物研究 姉妹篇』（平凡社、一九九二年刊）
  - 『新古今和歌集』（新日本古典文学大系十一、岩波書店、一九九二年刊）
  - 『今昔物語集三』（新日本古典文学大系三十五、岩波書店、一九九三年刊）
  - 花咲一男著『江戸名物図絵』（三樹書房、一九九四年刊）
  - 大久保忠国・木下和子編『江戸語辞典 新装普及版』（東京堂出版、二〇一四年刊）
- 〔付記〕 本稿執筆にあたり、掲載を許可して下さいました東京都立中央図書館特別文庫室に深謝申し上げます。また、東京大学総合図書館所蔵本につきましては、電子版霞亭文庫を利用させていただきました。お礼申し上げます。

(附) 前稿「黄表紙作者伊庭可笑についての基礎研究」追記

山東京伝作画『手前御存商賣物』(天明二年刊)三丁オモテの書き入れ「つう笑丈可笑士のさくにもすごひのがあるて」に付された水野稔氏のご指摘「士は士分の人としての敬称であろう」(注1)により、『寛政重修諸家譜』(内閣文庫所蔵、「国立公文書館デジタルアーカイブ」より)を検したところ、可笑に関する記述を見つけることが出来た。以下にそれを記す。(●は家督を継いだ者)

伊庭

正まこと要もと

市兵衛

享保三年十一月御徒にめしくはへられのち支配勘定に轉し元文四年八月二十七日班をす、められて御勘定となる  
寶曆三年正月晦日死す年六十三法名日應四谷の理性寺に葬るのち葬地とす  
妻は森田氏の女

兼かね季すえ

惠兵衛

母は森田氏の女

元文五年六月二十二日御勘定となり寶曆三年四月三日遺跡を繼のち評定所の留役をつとむ明和四年七月八日さきに科條類典を撰せらるゝのときその事にあつかりしにより黄金一枚を賜ふ六年八月十四日御切米手形役に轉す寛

政元年七月十七日兼季久しくひとりにてつとめしにより黄金一枚をたまふ九年閏七月十四日御裏門番の頭にうつり加恩ありて麩米百俵月俸五口の禄となる十年五月二十九日死す年八十七法名日新  
妻は藤堂和泉守家臣関庄七正忠か女

某

要人

正まこと致ゆき

門三郎

鈴木傳内正移か養子

正まこと道みち

庄右衛門

高濱彦右衛門某か養子となり後病によりて家に帰る

正まこと啓ひろ

余所五郎

某

早世

勝之助

當まさ登あつ

猪與八

母は正忠か女

寶曆十二年九月二十八日御勘定となり安永七年九月十九日務を辭し天明二年六月三日父にさきたちて死す年三十七法名要山

妻は福知百助信勝か女  
道羽みちのへ

次郎兵衛

関口九郎兵衛道借か養子

満桂みつり

他三郎

大井彦十郎長勝か養子

女子

女子

山角貞之丞久林か妻

當隣まさらみ

鉄太郎

母は信勝か女

天明二年十二月二十二日はじめて浚明院殿に拜謁し八年

八月十八日御勘定となり寛政十年八月三日祖父か遺跡を

継継時時にに三三十十四四歳歳  
慶慶米米百百俵俵五五口口

妻は中根喜四郎益興か女

道由みちよし

喜之助

関口次郎兵衛道羽か養子

女子

正季まさすえ

富之助

母は益興か女

直忠なをた

利七

向山三右衛門直知か養子

某

定五郎

家紋 丸に重釘拔すま 三龜甲

これにより、可笑（猪與八・當登）には、妻（福知百助信勝女・子（鉄太郎・當隣、喜之助・道由）のあった事、宝曆十二（一七六二）年九月二十八日に御勘定となるも、安永七（一七七八）年九月十九日に致仕した事、天明二（一七八二）年六月三日に、三十七歳の若さで死亡した事が分かる。

この『寛政重修諸家譜』編纂に当たり、同家より幕府へ提出したものと考えられる資料が『諸家系譜』（内閣文庫所蔵、「国立公文書館デジタルアーカイブ」より）にあり、そこにはより詳しい記述が見られる。以下、その内容を示す。（一）の中は、園田注）

（略）

當登マサアツ 猪与八

母 右同人女（藤堂和泉守家来 関庄七正忠女）

妻 福知百助信勝女小普請組 園野外記支配

宝曆十二年九月廿八日仰部屋住御勘定松平右近将監殿傳

安永七戌年九月十九日病氣二付願之通御奉公御免被下旨御同人江



仰渡候段安藤弾正少弼申渡

天明二寅年六月三日死三十七歳葬同寺号玄如要山

(略)

當隣ちか 鉄太郎

母 福知百助小普請組  
岡野外記支配信勝女

妻 中根喜四郎三浦和泉守組  
小十人益興女

明和二丙年二月廿日生 江府

天明二寅年六月三日父病死仕候二付同月廿七日祖父嫡孫承祖米願

(略)

右之通御座候以上

本国 近江

高百五拾俵 生国 武蔵 拜領屋敷下谷御徒町中ノ町御座候

内式拾五俵 御足等

三十五歳

寛政十一未年十二月

伊庭鉄太郎 (花押)

つまり、可笑は生涯部屋住みであり、病気のため致仕し、その四年後、病没したのである。

また、『武鑑』(国立国会図書館デジタルコレクションより)では、父・恵兵衛の役職と住まいの変遷を辿ることが出来る(左記に列挙)。

○『宝暦武鑑』(宝暦九年、須原屋茂兵衛蔵版)

卷三の十五丁オモテ

御勘定留役 こまだ

○『宝暦武鑑』(宝暦十一年、出雲寺和泉掾版)

卷三の十三丁オモテ

同(評定所)留役御勘定 すかも新やしき

○『大名武鑑』(宝暦十三年、須原屋茂兵衛蔵版)

卷三の十五丁オモテ

同(評定所)留役御勘定 七十表五人ふち すかも新やしき

○『大名武鑑』(安永三年、須原屋茂兵衛蔵版)

卷三の七十丁ウラ

御切米手形改 七十表五人フチ 浅くさとこへ

○『大成武鑑』(安永七年、須原屋茂兵衛蔵版)

卷三の六十九丁オモテ

御切米手形改 七十表五人フチ 浅くさとこへ

○『大成武鑑』(安永九年、出雲寺和泉掾版) ※登録名は「安永武鑑」

卷不明(登録は五卷) 六十五丁オモテ

御切米手形改 七十表五人ふち 御蔵前飯屋敷

これらの資料から、可笑は、おそらく生涯、部屋住みの身として、両親・妻子と生活を共にしながら、病弱の身をかこつ事も多かったであろう。出版状況から、可笑は黄表紙の草稿を書き溜めていた事が推測される。彼にとっては、黄表紙を書く事が、少なからぬ慰安となつたのではなからうか。

注

(1) 水野稔校注『黄表紙洒落本集』(日本古典文学大系五九、岩波書店、一九五八年刊) 九二頁、注二五。